

琉球大学学術リポジトリ

兼城の神女・せのきみ服飾遺品の考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 淳, 植木, ちか子, 上運天, 綾子, Kataoka, Jun, Ueki, Chikako, Kamiunten, Ayako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/918

兼城の神女・せのきみ服飾遺品の考察

片岡 淳*・植木ちか子**・上運天綾子***

A Study on the Religious Woman's Costumes and Materials, Kanagushiku, Gushikawa, Kume-island.

Jun KATAOKA*¹, Chikako UEKI**², Ayako KAMIUNTEN*³
(Received on 29 Oct 1999)

As we have seen, Okinawa's formal or ceremonious clothes have changed tremendously. This means we need to study the culture of Ryukyuan clothing with great care so that they will not disappear completely with out any available records. We must do our best to study for making the traditional Okinawan-style clothes.

1. はじめに

久米島具志川村字兼城177番地、当主は新城教一氏で屋号を前殿内(めーとんち)と称する家系に伝存する神女の衣裳、(当地では神衣裳(かみいしょう)と称し、以下これに倣う)及び神具などの調査を当主や家族のご協力のもと、下記のとおり行うことができた。

第1回 1998年8月16日 聞き取り調査

第2回 1999年4月25~27日

神衣裳形態の実測

第3回 1999年8月4~6日

神衣裳、衣材料の調査

最初の聞き取りは、同字在住の上江洲信七氏より兼城集落における神事と神女についての現状をうかがった。氏は氏の母堂もかつては神女であったが、どのような役目を担うのであったかは知らされなかったと語る。次に氏は、前殿内の新城家には、「どうやら古来の神衣裳があるようだ。もしそれらの調査に臨みたいのならば、調査依頼の

労をとりましょう。」と快くご協力いただけた。

第2回は、神衣裳櫃内の古形神衣裳の形態を中心に実測を行い、ほぼ全ての衣裳形態及び現神女の長井トミ氏の聞き取り調査を行った。

第3回は、神衣裳の衣材料についての調査と、当主よりそれらの伝来についての聞き取りを行ったが、当主は「これら女性のものについて、自分等男性には何の言い伝えも聞いていない。」と語った。以上が前殿内・新城家の口伝談であった。

2. 神衣裳と神具類について

(1) まず当家の神衣裳櫃管理は、母屋の一番座敷、しかも、いしきなほ城への遥拝と考えられる場所に設けられている。この場所は古くより、母屋のこの位置と定められていて、戦前は仏壇と同じように縁側へ向かって前開きであったのを、戦後になって現在の向きに設けたと当主は語った。

(2) ここの現神女の長井トミさんは、1902年の明治35年生まれで、当年97歳の高齢者である。彼女は、神女継承について次のように語った。

*¹ 島嶼文化教育教室

*² 国際服飾学会理事、非常勤講師

*³ 国際服飾学会会員、非常勤講師

「私が30歳の頃、一門中で行った神女選定の集まりでくじ引きがあり、私にくじが当たったので神女になったが、私自身はそのことに不満を抱いていたので、私に作られた神衣裳には手を通したことがなかった。」そして、彼女はその神衣裳を調える際には、衣材料購入費を門中より徴収したと語った。

(3) 神衣裳櫃内には、着用不可能な古形衣裳が重ね置かれた上に、長井トミさんの語る彼女の為の神衣裳が木綿風呂敷に包まれて収納されている。その他に、木綿小袋の中には、タマと称する約直径2cm大の水晶玉の連なった二連と小管玉を連ねた八連の手玉が納められている。

3. 兼城集落と祭祀

(1) おもろ時代から「かねぐすくどまり、久米のおやどまり」と謡われた良港の兼城港は、久米島具志川村白瀬川河口の兼城集落側に在る。そこは、往古から渡唐船の寄港地で、沖縄本島や諸島々及び大和（日本）への海外交通の重要な要津であった¹⁾。この兼城港は現在も那覇・久米島間を運行するフェリーや他の大型船が発着する久米島で最も大きな港である。その港の管理運営を担う兼城集落は、かつて嘉手苜集落後方丘陵に造営されていた、いしきな城（ぐしく）別名「ちなは城」との関係が深いところである。

(2) 按司時代末期のおよそ16世紀初期頃、いしきなは按司の長女が、兼城集落のうふなか（大中）と称する屋敷に住んでいた兼城のひや（後に兼城大屋子と称した）のところで嫁いだということが、1743年第2次間切旧記編集の『久米具志川村間切旧記』に次のように記されている。「いしきなは按司長女のこと……いしきなは按司第一之御娘ハ兼城大屋子妻ニ而兼城村大中と申所ニ有之候、此大屋子、本ハ兼城ノおひやニ而候処、按司婿ニ成候故大屋子ニ為罷成由候。今兼城おひや先祖ニ而在所モ本ヨリ不相替ニ、今有之候²⁾。」このいしきなは城は1510年前後ごろ、尚真王の首里軍によって落城したとされている³⁾。

(3) 琉球の宗教的現象を政治との関係を把握し、祭政の原理についての研究者鳥越憲三郎は古築城内の御嶽発生の原理について、つぎのように述べている。「……城内の御嶽は、最初から政治目的、

或いは政治的作為のもとに設けられたものであった。……城内の御嶽は、城主の領域内に住む人民の守護神として設けられたというよりも、むしろ城主のため、すなわち政治的主権者として城主の威厳を維持するためのものであり、城主は城内の御嶽に降臨する神々の子孫、或いはその代弁者として人民に対処したのである。その点、一般集落にみる御嶽の神の機能は、その集落及び、彼らと血縁的に結ばれている村人を守護する御嶽とはおよそその目的なり、内容なりは異なっていたといわなければならない。政治的主権が城主なる按司の掌中に委譲されたとき、宗教的主権も同時にノロと呼ばれる巫女の手に移った。ノロとは按司の姉妹から選ばれた巫女のことである。かつて、根人と根神との兄妹（あるいは姉弟）による二重主権が成立していたように、城郭時代に入っても同じく按司とノロとの兄妹（あるいは姉弟）による二重主権が成立していたのである。……しかも巫女には俗名の他に、神との交わりの際にのみ用いて他人には一切知らさない神名（かみな）があった。この大切な神名を継承するということは、一切の祭祀権を継承することを意味した⁴⁾。そしてこのようなノロは、その城主のもつ主権を擁護し、維持するという政治的意図のもとにつくられた城内御嶽の神に奉仕する巫女であった⁵⁾。」

(3) 鳥越憲三郎の研究から考察するに、按司時代のいしきなは城御嶽で祭祀儀礼を掌った神女は、兼城のうふなかへ嫁いだ按司の長女で「せの君」神女ではなかったろうか。恐らく、その按司の長女の生んだ女子の一員が、同兼城の某新城家（前々代の前殿内・新城家かと筆者は考察するのである）に嫁いでそこで生まれた女子が思戸（おみと）で、そしてその思戸が、同兼城11番地で屋号を石垣殿内（いしがきとんち）と称する「元祖由来記 喜久里記」「巫馬姓家譜」の喜久里家の元祖・教道（国頭里主）の室となったのであろう。その家譜には、「元祖教道 国頭里主 童名真牛生寿並忌日不伝 父母為何人不伝 室兼城村新城女子思戸 生寿並忌日不伝 長男教成 我那覇里主」と記されている⁶⁾。二世教成の母は兼城新城女子思戸で、二世教成は1645年の順治2年9月3日に死亡したとあり、次に「但一世二世之兩人御奉公次第年来程久相成候故不相記候」と記されている。教

成の長男教治すなわち三世教治は、1616年の万暦44年生まれとあることなどから、教成の母思戸は恐らく1580年前後頃のおよそ20才頃に、巫馬姓喜久里家の元祖教道のもとへ嫁いだのであろう。とすれば、新城女子思戸のおおよその生年は、1550～1570年前後頃と推定されるのである。故に1500～1510年頃、20才前後でうふなかに嫁したいしきは按司の長女の娘（推定で1515～1540年前後生まれか）が、某新城に嫁したであろうことが推しはかれる。その某新城へ嫁した女子は、うふなかに嫁した按司の長女である母親の神女役を継いだであろう。そのまた神女役を継いだのであろう新城女子思戸が、喜久里家元祖教道のもとへ嫁いだことが推考できる。その「巫馬姓」の命名を推考するに、巫は即ち神女、その神女は馬に乗って、いしきは城御嶽の祭祀に就いたことで、そのように命名したのであろうか。そしてその神女の神名は「せの君」ではなかったろうか。この教道と思戸の長男は教成でその教成の長男教治、すなわち教道と思戸の直系男子の3世は萬曆44（1616）年生まれで、康熙28（1689）年に死亡と巫馬姓喜久里家家譜に見えている。この教道の妻思戸の死後、その神女役を継いだ年代は、およそ1590～1620年前後であろう。そこの家譜を見る限り教道と思戸の夫妻には長男教成のみで女子は生まれていない。ならば思戸「せの君」神女の死後その神女役は、思戸の実家・新城家の某女子（思戸の姉妹かあるいは女子系の子女）が「せの君」神女役を継いだ女子の某が、前殿内・新城家の位牌にみえる元祖かで、1661年死亡の「掃一心月照禪定尼」と記されている女性ではなかろうか。この前殿内・新城家の元祖は、女性が元祖となっていて、現当主の教一氏は第十世となっている。そこの八世教信は嘉手苜家（屋号・殿内小）、七世教喜は上江洲家（屋号・後太田）から養子入りとなっていて、どうもそこは女系を中心とした家系のように窺える。

(4) 現神女の長井トミさんによると、就任当時の祭日には、まず巫馬姓喜久里家の火の神および遠い先祖の祀られているという祭壇の香炉を拝した後に、前殿内・新城家の神女祭壇に詣で、それから後に馬に神衣裳を乗せて、いしきは城に登ったと語る。その馬子の男性は、前殿内・新城家よ

り分家していった屋号が新城達（あらぐしくたー）と称する新城盛善家系である。この長井トミさんの祖父は、前殿内・新城家から後太田・上江洲家へ養子入りした前殿内・新城家八世教則の孫になるという。

(5) 16世紀の初頭、尚真王によって琉球に中央集権が確立されて政治的統一と共にその政治的主権を擁護すべく巫女組織を大成して、宗教的実権を同時に掌握し、国家的統一を成功させた。その巫女組織の頂点に国王の姉妹から巫女を選出して国家的祭祀に当たらしめた。この巫女を聞得大君という。この聞得大君の下には、高級女神官として三人の大あむしられが設置された。これら三人の大あむしられには、首里国都の三つの丘に各自居を構えさせて、遠く各地の管轄内の巫女を治めしめた。首里殿内（中山）、儀保殿内（北山）、真壁殿内（南山）がすなわちそれである。これら三人の大あむしられの下には、村々に派遣されたノロがいて、彼女はこれら管轄内のノロを監督したのであった。ノロは村々に設置されており、国王からの辞令と祭祀用の曲玉とを授けられて、各々の区域内の祭祀を掌った。聞得大君の命令は、三人の大あむしられを通して、各ノロに伝達され、ノロはその聞得大君の聖意を一般人民に伝えることになった⁹¹。これら国家的統一後に、王府の主権をもとに体系付けられて任命されたノロを公儀ノロと称した⁹²。

(6) 按司時代のノロと国家時代のノロとは、同じくノロと呼称されながらも、両者には内容的に大きな差異がある。前時代のノロは、按司の主権のもとにおける最高の祭祀主権者として存在し、按司の姉妹から選ばれた按司との二重主権を確立していたのであった。しかし、後代のノロは、王府の主権のもとに体系付けられた巫女組織下の部落祭祀担当者にしか過ぎないのであった。すなわち、前者は自分の権力において宗教的主権を掌握したものであるが、後者は、聞得大君および大あむしられの支配のもとに任命された巫女なのであった⁹³。

(7) 按司時代のいしきは城御嶽での祭祀を掌るせち高き神女は、「せの君」と『おもろさうし』に記されている神女であったであろう。「せの君」は「精の君」、「宜の君」とも称せられ、船の航海

安全祈願にすぐれた威力をもっていたとされている。『おもろさうし』第13 船ゑとのおもろ御さうし、天啓3(1623)年に集録された中の2～3を以下に記す。これらに可能な限り漢字を当て、濁点を付けて口語訳をする前段階の直訳を、理解を助ける目的で記すと右記になる¹¹⁾。

かうちすつなりかふし

- | | |
|--|--|
| 一 きこえ、せのきみか、
こいしの、おもか、かはの、
みしま、ようしま、からと、
かなしや、ある | 一 聞え精の君が
こいしの おもかかはの
三島 四島からど
愛しやある |
| 又 とよむ、せのきみか、こいしの
又 いしけ、なは、まみやに、
けさ、けらへ、あるよる
うちいてはとしましおそいかふし | 又 鳴響む精の君が こいしの
又 伊敷素真庭に
けさげらへ 有る居る |
| 一 きこえ、せのきみか、
うらはりきや、みもん | 一 聞え精の君が
浦走りぎや 見物 |
| 又 とよむ、せのきみか
あやけらへのふし | 又 鳴響む精の君が |
| 一 きこへ、せのきみと、
つとりきや、わちへ、 | 一 聞え精の君と
つつ 取りきやわちへ |
| 又 とよむせのきみと
又 せのきみか、おうねや、
わしか、まやい、とみ | 又 鳴響む精の君と
又 精の君が御船や
鶯が舞やい富 |
| 又 あちおそいか、おうねや、
けらへ、しま、うちとみ | 又 按司襲いが御船や
げらへ鳥討ち富 |
| 又 わしか、まやい、とみと
けらへ、しまうち、とみと | 又 鶯が舞やい富と
げらへ鳥討ち富と |

(8) 久米島おもろは140首程あり、そのうち「せの君」を謡ったものが29首もあって、その「せの君」は航海もする勝れた神女であったとされる¹²⁾。このような由緒ある神女「せの君」を生じたのであろう前殿内・新城家に伝承されている神女の神衣裳は、恐らく、その元祖・忌み名が「婦一心月照禪定尼」で1661年に死亡した女性の遺品かと推考するのである。

萬曆35(1607)年頃、「せの君」神女が琉球国王、いわゆる尚寧王の無事・無難や守護を願う『おもろさうし』が数種残っている。それらの一部を次に記す¹³⁾。

尚寧王加那志御代

萬曆三十五年ひつしのとし十月十日つちのとのみのへにせんきみの御まへより給申候
あおりやえかふし
きこえせんきみきや、
すへ、とまへて、おわれちへ
あんしおそいに、
しまか、いのち、みおやせ、
又 とよむ、きみとよみきや、
ませねかて、おれわちへ
又 あまみや から
すへの、きみ、やれは
又 しねりや、から
あいちへ、きみやれは
又 さしふ、五ころに、
みまふてす、おれたれ
又 むつき、七ころに、
かいなててす、おれたれ
又 大きききや、御さうせ
てるかはは、のたてて

尚寧王加那志御代

萬曆三十五年未の年十月十日己の巳の日に、精ん君の御前より給申候
聞え精ん君ぎや
末 尋まへて 降れわちへ
按司襲いに
鳥が命 みおやせ
又 鳴響む君鳴響みぎや
真末 願て 降れわちへ
又 あまみやから
精の君やれば
又 しねりやから
相手君やれば
又 さしふ 五ころに
見守てす 降れたれ
又 むつき 七ころに
掻い撫ててす 降れたれ
又 大君ぎや 御想ぜ
てるかはは 宣立てて

(9) その尚寧王は、島津軍によって1609～1611年の間、大和に連行された。おそらくこの期間、琉球国中の神女たちはあらゆる神事、いや日常的にいろいろの呪詛、呪文を試みて王の無事・無難を祈念したであろう。特に「せの君」神女の祈りは、航海安全、無事、無難の神功が大きいと当時の世相はそう信じていたであろう。そして王が無事に帰国できたことは、「せの君」神女の祈りの結果、それが成就したと人々はそう感じたと筆者は推考する。

その頃、渡航にかかわった某氏、たとえば神女本人か巫馬姓喜久里家の某氏でおそらく3世の教治かで彼は、1641～1645年は具志川掟役、1645～1654年は濱川掟役、1666～1671年は首里大屋子、1671～1682年は濱川夫地頭を勤め、1676年には黄冠、1679～1682年には座敷(従四品で平士ではこの位までのほる¹⁴⁾)を勤めた。その3世教治の役勤めでは、大和渡航船などとかかわりがあったろうが故に、その頃大和(特に京都あたり)で流行っていた極めて精巧な平絹の型染め品で、前殿内・新城家元祖「せの君」神女の胴衣用の品を調達し

たのではなからうか。それともそのような絹物は、敗戦後の混乱極まっていた王府から内々に特別に下賜された品物であったのだろうか。その出自についての確証を得ることはできない。

その胴衣の型染紋様、色使い、そして技法ともに洗練されたもので、とういて琉球最古の紅型染品とは思えない。この平絹型染胴衣と同櫃内に納入されている芭蕉布地に亀甲紋様の中に小桐紋や吉祥らしき紋をあしらった稚拙な多色型染の神事用長巾に、手紉った房を縫い付けた神みさじは、型や紋様そして色使いなど明らかに初期の紅型を思わせるものである。

ちなみに1500～1600年代の神女自ら渡航して八重山征伐や大和へ曲玉などを買い入れに行ったことが『おもろさうし』にみえている。

願わくば、この前殿内・新城家に伝存する平絹型染品の徹底した科学的調査を希うものである。

註

- 1) 仲村昌尚, 久米島の地名と民俗, 「久米島の地名と民俗」刊行委員会, 1992, P15～17
- 2) 具志川村史編集委員会, 久米島具志川村史, 具志川村役場, 1976, P106
- 3) 前掲2), P118
- 4) 鳥越憲三郎, 琉球古代社会の研究, JCA出版, 1944, P132～134, 136～137
- 5) 前掲4), P147
- 6) 沖縄久米島調査委員会, 沖縄久米島資料編「沖縄久米島の言語・文化・社会の総合的研究」報告書, 1983, P389～402
- 7) 上江洲智俊調査, 新城家世系図, 1985
- 8) 前掲4), P143～144
- 9) 宮城栄昌, 沖縄のノロの研究, 吉川弘文館, 1979, P82
- 10) 前掲4), P144
- 11) 外間守善, おもろさうし, 角川書店, 1993, P307
- 12) 前掲2), P48, 100
- 13) 前掲11), P120
- 14) 真栄田義見他編, 沖縄文化史辞典, 東京堂出版, 1972, P430

4. 衣裳調査報告

ここの神衣裳は古いものから比較的新しい明治・大正時代のものまで残されている。これらの染織資料を見ていると、その時代の服飾文化を反映していることが知れる。以下、調査した内容を報告する。

芭蕉平織濃紺大袖衣 (図1-A・B)

これは琉球式縫製の単仕立ての表衣で、通常は黒朝と称する。形態の特徴として、40cmの布幅いっぱいを使っているため、肩幅・後ろ幅とも広い。袖は広袖で、袖丈は身丈の約1/2で長くゆったりしている。袖下に正方形の布襦(わちすび)をつけている。衽下がり及び衽下は短い。衽は広衽で衽丈は長く、着装時には外折り(けーしくび・けーしえり)に整える。布の裁ち方は、衽を鈎衽に裁つと左前衽が2枚とれる。その一枚を右前衽にすると裏側が表面になるので、表裏がはっきりしない布が鈎衽裁ちに適している。極く上質の薄い芭蕉布なので縫い方は背・脇・衽付けの直線縫いは細かい針目のぐし縫いで、縫代も4～5mmと細く、丁寧な仕立てである。衽付けは4mmほどの細かい袋縫いで、裾・衽下・衽先端は細い三つ折りぐし縫い仕上がりである。そして、袖口・衽下・衽端などは、布耳をそのまま用いている。右脇縫代の裾から54cmの位置に8cmの麻糸紐が付けてある。それは、歩行時に身丈を調節するため、背・脇・衽付けの縫代に麻紐が付いていた痕跡があった。このことから、女性用であることがわかる。素材については、経糸・緯糸とも機結びである。

苧麻平織青色大袖衣 (図2-A・B)

形態や縫い方はほとんど前述の衣裳と同じである。

芭蕉や絹の染織資料が多い中で、この資料の素材は苧麻繊維であり、他の資料よりも比較的厚く織られた布の衣裳である。繊維の中及び平織の交差したところまでむらなく染められており、薄い藍染めを何度も繰り返し、染め重ねた青色になっている。この資料の他にも、房や紐に苧麻糸を利用しており、久米島では袖以外に苧麻糸がもたらされていたことがわかる。

苧麻平織白地笹に梅小花唐草模様大袖衣（図3-A・B）

前述2点の衣裳の身頃はほぼ同じであるが、腰位置に揚げがあり、身丈を調節したことがわかる。全体の寸法や腰揚げ位置から、男性用と思われる。縫い方にも少々違いが見られ、裾折り・衿下は三つ折り「まつりぐけ」で始末している。琉衣は、ぐし縫いがほとんどであるところから珍しい仕立てである。

模様の墨と朱をとところどころに色差しして、藍蠟を全面に差している。一見、一面に藍色の唐草模様が目に入るので、藍の浸け染めかと思われるが、両面に糊置きをして、藍色を差している。大刷毛で引き染めする方法をとると、布の両耳に伸子の針痕ができるはずであるが、そのあとはなく、小刷毛にて色差しした資料であろう。笹の葉に小花唐草模様の上品な男性用白地紅型衣装である。白地の藍型は一般的に士族の礼服または晴着であり、士族の扱いを受けた者がいたことを物語っている。

絹平織緑地菊花鎖繫模様単胴衣（写真1・2及び図4-A・B）

身丈は肩山から腰を被うほどもある膝丈で、袖は筒袖となっている。当主の話によれば、現在は片袖しか付いていないが、父親は両袖共に付いていたと語る。この図には、その袖の付いていない部分を点線で示した。左右の衿幅が異なる。左上前衿は広く24cmもあり、3本の襷がある。衿は共布の衿仕立てとなっている。着装の際は、衿を外折りにする。左衿先と右脇に薄褐色の紐が付いているが、もとは白色であったと思われる。素材、染色技法については6項で述べる。

芭蕉平織太緯縞単胴衣（図5-A・B）

暗褐色に染められた芭蕉の太い2本の緯糸が約2cmおきに二段織り込まれた極く薄い平織の芭蕉布である。緯糸が自然にうねる表情をつけた上品な地合の織物である。経糸に比べて緯糸がわずかに細いため、布にしわができる。当時の人の美意識の高さは、現代に生きる我々に新鮮な感動を与える。



写真1. 絹平織緑地菊花鎖繫模様単胴衣

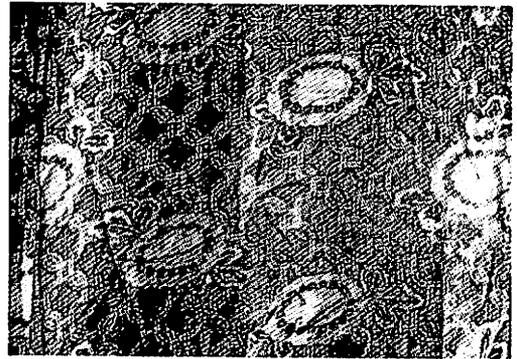


写真2. 写真1の拡大

絹平織金茶地格子縞単胴衣（図6-A・B）

身丈が短く、身幅は広い。衿丈に対して、袖丈・袖口が細い。また袖付けと脇が真っ直ぐではなく、ゆるい曲線になっている。後左身頃の袖付け下側に30cmくらいの切り取られたあとがある。左衿の衿下側に襷が4本、両脇明に各3本の襷がたたまれている。脇襷は、袖付け側から身頃に向かって円を描くような切込みを入れてあり、さらにその脇布部分を襷として納めている。脇明止まりでは、重ねて襷をたたみ込み、裾は1cm間隔に3筋にたたんでいる。左衿先に紐通しの輪が付いており、そこに紐を通し、脇紐と結んで着るが、この胴衣には脇紐が付いていない。おそらく取れたのであろう。

現在は薄い茶色の黄色の濃淡の裂地である。しかしよく見ると、縫い目のところにわずかに赤味

色を残しており、当時は赤地に青と灰色格子縞が映えたことであろう。経・緯糸とも紬糸を使っている。左前衿先には四筋の襷が太めの糸で仕付けられている。脇明も長深く、古い形式の衣装である。絹種類は真綿の糸を使っている。

芭蕉平織赤茶単胴衣（図7-A・B）

形態は図6と同じであるが、脇明の襷はない。平均密度1cmに経糸28本、緯糸34本の布幅47cm程の芭蕉布である。芭蕉糸は経緯糸共機結びである。

芭蕉平織裙（図8）

裙は一種の長い巻きスカートのようなものである。裙幅の総用布は39cm幅の布を14枚接ぎ合わせている。縫代は1cm。裙の両端は布耳使いをしている。裾上げは大きく、折りぐし縫いをしている。胴回りの襷の縮め方は細かく3mmの襷畳みをしている。

やや太めの芭蕉糸を平織したものである。前述図4の胴衣との組み合わせは、たいへん美しい意匠である。胴回り布の端に輪状の紐通しが付いている。それに別紐を通して、胴へ回して結ぶ。裙の布を構成している芭蕉糸は撚り緊ぎである。

木綿平織藍色裙（図9）

比較的新しい資料であるが、手紡ぎ木綿糸でしっかりしと織られた生地である。藍染めを施している。

木綿平織白裙（図10）

布幅は並幅ではなく、68cm幅の2枚と74cm幅の1枚を接ぎ合わせた裙である。胴回りの襷は不揃いの箱襷である。胴回り布をそのまま長くしている。

絹脂地経縞に経糸浮紋織長巾（写真3）

約15cm間隔に様々な紋様が織り出されているたいへん珍しい染織品である。脂地にそれぞれ金色と青銅色の経の紋糸も複雑に織り出しをしている。『歴代法案』に見られる「花緞」に該当するものか。15世紀の東南アジアの暹羅（シャム）や爪哇（ジャワ）からの舶載品にその花緞の文字が見られる。この資料の糸端の処理に特徴があ

る。現在のインドネシアの緋に見られる経糸の処理とはほぼ同じ方法である。

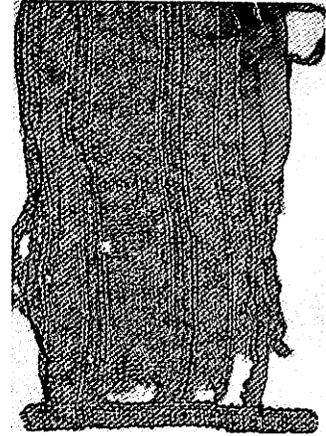


写真3. 絹脂地経縞に経糸浮紋織長巾

絹平織金茶地苺手模様手帕美巾（図11）

丈が長く、布幅も広い。ふさは緯糸ぬきのままである。

地は生糸に近い玉糸の平織地に、緯糸は精練された絹糸を藍染めし、色糸で模様を織り出している。このような風格の手帕美巾は、沖縄県立博物館・奄美博物館・沖永良部島など各所に類型を見ることができる。

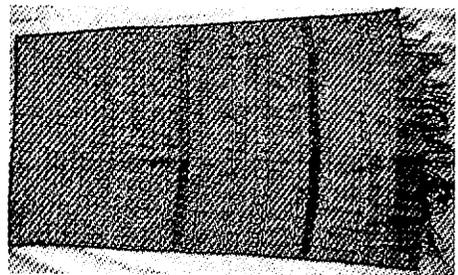


写真4. 絹平織金茶地苺手模様手帕美巾

木綿平織藍色格子縞手帕（写真5）

藍染めされた木綿の格子縞の手帕である。白と藍色だけであるが、格子模様が美しい。その他5点の木綿手帕は平織無地である。手紡ぎのものから、最近の紡織綿麻混紡までである。1611年、儀間真常が薩摩より木綿種を導入している。また栽培

して木綿を織らせたとある。現在久米島では藍染めを日常的には行われていないが、当時はどの家でも行っていたのではないだろうか。この資料の他にも、木綿糸を織り混ぜた紬や藍染苧麻など数多くの染織品を確認できた。

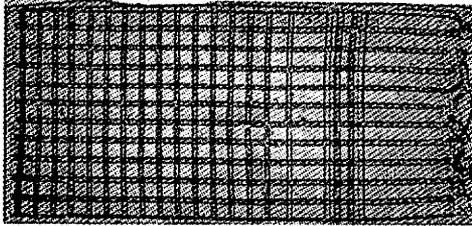


写真5. 木綿平織藍色格子縞手帕

芭蕉平織灰緑地亀甲吉祥模様紅型手帕（写真6、7及び図12）

手帕の片側の端は三つ折りぐし縫いで、別紐丈は15cmほどの長さで、絹・木綿・苧麻製の撚りかけをした双糸の房が縫い付けてある。片方は切り落とされており、原形の計測不可能である。神事用はちまきとして使ったものであろう。

芭蕉平織生地に糊型置き、黄・赤色の顔料を不規則に色差しを行い、残りを藍色に染める。さらに糊を落として、黄と赤色の部分を糊伏せし、全体に灰緑色に染めている。片面糊置きである。

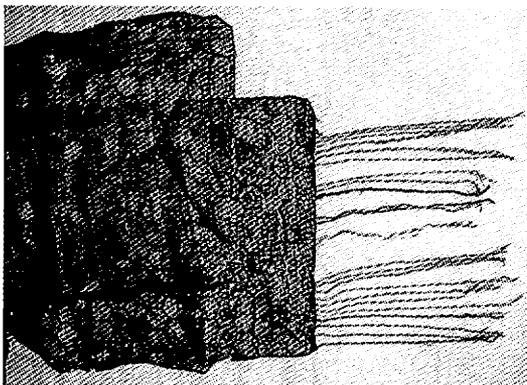


写真6. 芭蕉平織灰緑地亀甲吉祥模様紅型手帕

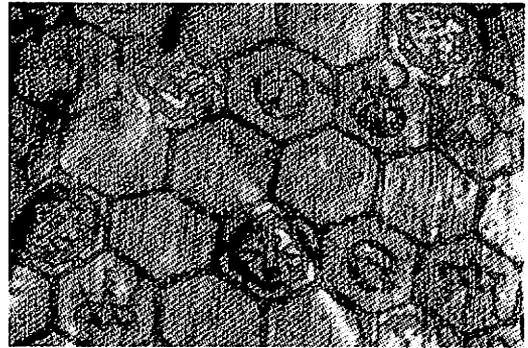


写真7. 写真6の拡大

5. 絹の技術導入について

1619年、越前の人坂元宗、久米島に養蚕を伝えたとある。それでは原書出典ではどのような養蚕技術であったのか。その解釈については、新しい養蚕技術の導入、製糸技術—生糸と真綿糸作り、その他が考えられる。

越前は、奈良時代から鎌倉時代、江戸時代と良質の絹の産地であった。年貢として米の代わりに絹織物の原料の綿を年貢綿として取っていた。この綿は呉綿ということがあったという。また国絹十疋と見えている。薩摩侵攻以後、当地久米島も税としてよりよい絹織物を納めさせる政策として、より効率のよい養蚕を伝えたのであろう。また紬は保温性・耐久性にも優れ、高価であり、この製糸方法を伝えたとみる。『天工開物』によると、真綿から太糸をつむぎ、それで織った湖紬の値段はすこぶる高いとあり、統ともいう。また、1632年、薩摩の人酒匂氏友寄景友、久米島に八丈島織を伝える。ここでの八丈織というのは、八丈絹のことではないか。八丈絹とは美濃、尾張の広機をさし、一匹八丈（ $8 \times 31.10\text{cm} = 24.88\text{m}^{15}$ ）としている。より効率のよい生産と年貢を納めさせるための指導であろう。美濃・尾張は平安末から広絹を織っている。

どのような技術導入が当時あったのか。また八丈島織とすると、染色技術のことである。八丈島織というのは、「黄色」「樺色」「黒色」の三色からなり、こぶな草、タブの木の生皮、椎の木の皮を使う。黒は鉄分を含んだ田んぼの泥を使い、泥に含まれる鉄分を媒染剤として使う。その技術が

伝わったのであろう。久米島ではこぶな草の代わりに山桃（楊梅）を使う。このことを久米島紬の起源とする見方もあろうが、むしろ新しい染色技術の導入と見たほうがよいのではないだろうか。仲里村に伝存している絹織物には、藍色や赤味のある色（薄紅色）などがある。これを機会に泥染め色の絹織物が加わったのであろうか。今後どのよう程度まで時代が下がるか断定できないが、現物資料を分析してこのことを実証していきたい。

絹糸には均一な生糸のほかには玉繭がある。玉繭とは、蚕2匹以上で1個の繭を作ったものであり、これが玉糸（節糸）の原料になる。経糸は比較的均一な玉糸を用いているが、緯糸は太さにかかなりのむらがある。

6. 最古といわれる紅型について

従来は染め地型を含めて紅型としていたが、それでよいのであろうか。紅型の定義は白地型とすべきではないだろうか。紅型は、まず染め際の美しさがあげられる。はっきりした輪郭とそれを強調するほかし染めが特徴の一つである。また、同じ葉や花の模様を同じ色料であたりまえに彩色するのではなく、全体のバランスを見ながら、自由に配色している。それに反して、伏せ糊は模様の輪郭へきっちりと置くのではなく、多少のはみ出しや、白場は気にしないおおらかさがある。白地型に比べて、染め地型は「つり」の関係で、模様の輪郭をはっきりと表わせない。

紅型は染め型紙の技巧を尽くすよりも、染め色の華やかさ、配色やほかし技術、染め際の美しさを大事にしているようだ。

(1) 工程について

1. 絹に紅型を施すのは、尚家伝来資料のみであり、それ以外の資料は他に確認できていない。尚家縁りの言い伝えが確認できない。
2. 小紋は引き染めである。この他にも中型や地細工も同様な技法で染められている。
3. 色差しれが均一化している。
4. ほかし染めがない。

(2) 素材について

型紙・模様等の特徴

滷添型 澤砥家が伝えていたもので、黒・白・灰・薄青色の顔料を直接型紙を使用して生地に摺り込む手法である。顔料の接着にはコンニャク糊が使用され、模様は小紋に限られていた。

(3) 彩色について

片面染め、所謂引き染め染色¹⁰⁾をしている。ただ今日行われている両端を張り木で固定して伸子張りして染める方法よりも、台の上に生地を置いて色差しする方法であろう。

染色工程順序

1. 染め地型糊置き
2. 菊花模様の赤系統の色差し 定着
3. 菊花模様部分の伏せ糊
4. 襷模様を含めた地模様の青色染色
5. 襷模様の伏せ糊
6. 黄色系の染色
7. 糊落とし（水元）

絹生地が極薄く、型置きや伏せ糊にかなりの熟練を要す。紅型の特徴としての伏せ糊の様子がこの資料はごく丁寧に糊付けされている。たいていの紅型は、おおらかに伏せ糊をした白場がみとめられている。また色差しはまったく均一に染められており、菊の葉の彩色に変化が全く見られない。このことは他の紅型資料と比較するとその違いがよくわかる。このような白場・型紙の緻密さ・色差しの単調な様子からみても、果たしてこの資料が沖縄の最古の紅型の資料と成り得るだろうか。

中型という木綿織物に糊置き藍染めした後に、顔料を差した染織品がある。たいてい弁柄をステンシルしている。つまり型紙を用いて、色を差したところに筒糊置をして防染する。紅型は、型染めに筒描き糊を併用した染色技法といえる。厳密に言えば、型の上に墨摺りした紅型もあるが、これは紅型の色差しとして全般的に行われている技法ではない。しかし、この資料の色差しは和更紗によく用いられる合羽摺り染め技法ではなく、紅型同様の手彩色をしている。この点が、紅型の技法と共通している。ただし、この技法によく似た

ものに地細工（じざいく）がある。江戸時代中期に木綿の生産が全国に広がると同時に、各地に地細工といわれる多色の型染めが行われた。北九州、山陰、金沢、東北が主な産地¹³⁾という。この資料が地細工であるならば、江戸時代は中期ということになろう。絹の染色をする金沢の友禅染めを扱うところであれば、このような絹の多色型染めは可能であろう。上限は江戸時代後期から明治時代までであろう。しかし、この資料は木綿ではなく絹平織製であり、さらに時代がさかのぼるだろう。

平安末から室町時代にかけて紺掻や染師の座が京都や奈良で特に盛んであった。川越喜多院の『職人尽絵』屏風は狩野吉信（1552-1600）筆による風俗画を見ると型付け屋の様子がよくわかる。長板の上で反物に竹籠で糊置きしている様子や、刷毛を手にもつ姿など型付け屋の様子が詳しく描かれている。染め上げた反物を伸子張りし、張り木を持つ女性は、置き火に布を当てて乾かしているのであろう。刷毛を持つ男の描写から、机の上に糊置きした反物に、色料を摺り込みしているようだ。干し場には、白地に色々な模様が染め上げられている。1本は染め地型を用いているのだろう。白く模様が染められている。絹布に顔料差しする染物に友禅染めというものがある。宮崎友禅斎（元禄時代1688-1704）にその名が由来する。糸目糊の内側に彩色した自由な絵画的模様や、丸模様の表現が特徴である。これらは堀川近辺四糸から五糸周辺の染工房がその発展の礎となっていたと丸山伸彦氏は『日本の染織5友禅染』京都書院美術双書のなかで述べている。ということは室町から桃山時代、そして江戸時代にかけて、型染めや摺り箔などの型紙を用いた染物が続けられていたことを物語る。そして江戸中期から特に見られる地細工という木綿の多色染めの先行資料として、絹の多色型染めが行なわれていたことは十分に推測できる。このことからこの平絹型染は京都辺りの染織品ではなからうか。

以上のように、由来そして技法の点からこの平絹型染は紅型の最古の資料ではあるまい。

(4) 歴史的背景について

室町時代から江戸時代にかけての型染について述べる。糊防染の型染は、室町時代から江戸時代

にかけて京都・奈良を中心に各地で盛んに作られた。この最古の遺品は、鎌倉時代にまで溯る。「藤巴の丸文様家地籠手」といわれるものである。国宝春日大社に伝存され、麻薄藍色地に藤巴の丸文様を白く染め抜いている。源義経所用と伝えられる鎌倉時代の籠手である。また、東京国立博物館蔵の狂言装束「日本傘文様素袍」は室町時代末期の作といわれている糊置き型染めの染織資料である。

襷模様 普通は背面でX字形に結び、祭礼のときの若者の襷、田植えのときの早乙女の襷など、神を祭るときの服装のひとつとされる起源をもつ。実用よりも儀礼的な意味を持つ模様である。

絹綾織地七宝花襷模様藍絞染半臂 高野山丹生（にう）神社天野社の一切経会に行われる舞楽装束のなかの半臂「右後頭 天野一切経会 試楽享徳三年 申戌三月日」（1454年）の模様が、襷に花模様である。

菊模様 中国では1000年も以上から栽培されているが、400年ほど前に中国より渡来した植物である。豊臣秀吉の桃山御殿の天井絵に写生した栽培菊の絵がある。江戸時代に改良されて様々な種類が現れた。九重菊（ここのえぎく）といわれる種類によく似ている。しかし、園芸用としてより以前から、菊の利用はあった。前述の籠手に菊模様の金具がつけられていることから、鎌倉時代それ以上前から使われている。紅型染色資料の中にも菊を扱う模様もあるが、模様による時代の変遷の研究もなく、難しい問題である。ただ、中模様の襷模様との併用、あるいは染め地型紙の似た意匠資料は、他には見受けられない。

絹平織 均一な太さの絹糸である。このような絹糸は、大袖衣に用いられている。久米島その他の地域に伝存する絹織物は、玉糸使いの織物がほとんどであることが確認できた。

7. おわりに

久米島兼城の新城教一氏、上江洲信七氏、長井トミ氏にはお忙しいにもかかわらず、われわれの度々の聞き取り調査に快く応じてくださり、さら

に、たいへん貴重なお話しを伺うことができ、心から深謝します。なお、この稿の伝来を植木、服飾寸法表と縫製調査を上運天、技法と衣材料の考察を片岡が分担した。このフィールド調査の一部は、文部省科学研究費（1998～99年度）によって行ったことを付記する。

註

15) 歴代度量衡 1尺は宋・元／30.72、唐・明／31.10、清／32.0、現代中国／33.30、日本／30.30cmである。八丈は $31.132 \times 8 = 24.88 \sim 25.6$ m

16) この場合の染色とは、顔料の色差しを指している。正確には彩色を施すということになるが、

生地がいわゆる絹布であり、引き染め方法のため、染色ということばを用いた。

17) 別冊太陽木綿古裂，平凡社，1996年，P58

参考文献

琉球王伝来衣裳刊行会編，琉球王家伝来衣裳，講談社，1972年

古琉球紅型（一期・二期），1974年

大滝幹夫，日本の美術12，No.343，染めの型紙，至文堂，1994年

山辺知行，紅型，日本の美術127，1976年

渡名喜明，琉球紅型，ワイド版染織の美，京都書院，1980年

品目・目録表及び形態図示と縫製について
 以下、寸法表と作図の単位はセンチメートル。

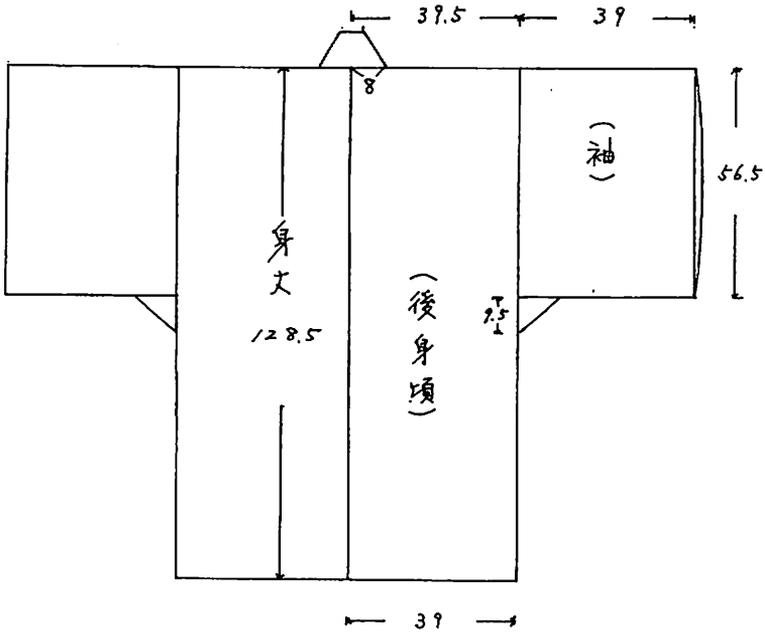


図1-A 芭蕉平織濃紺大袖衣・後身頃実測図

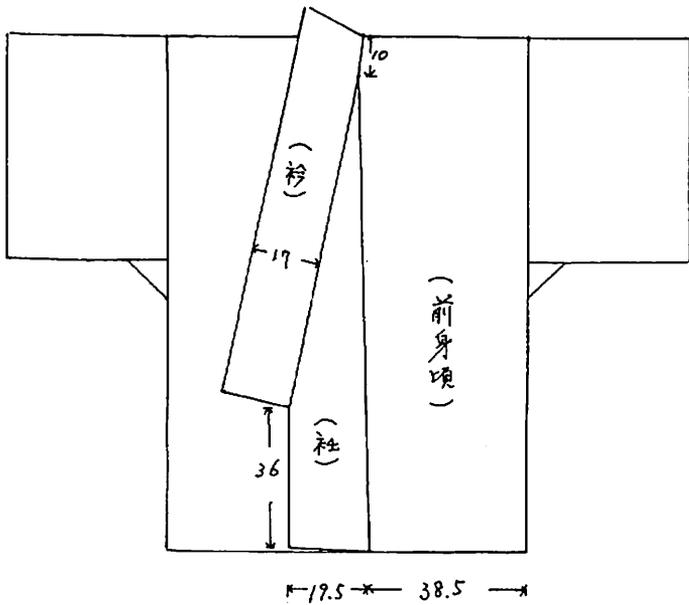


図1-B 芭蕉平織濃紺大袖衣・前身頃実測図

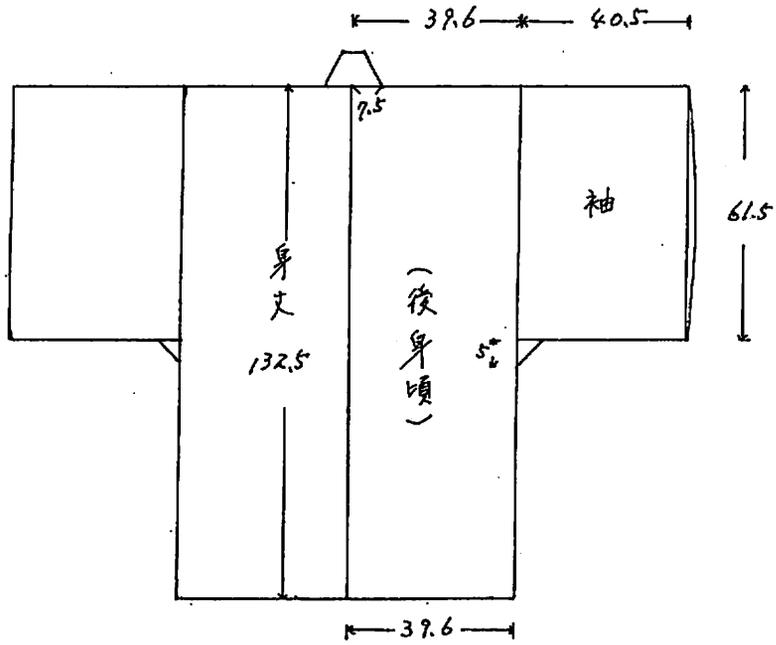


図2-A 苧麻平織青色大袖衣・後身頃実測図

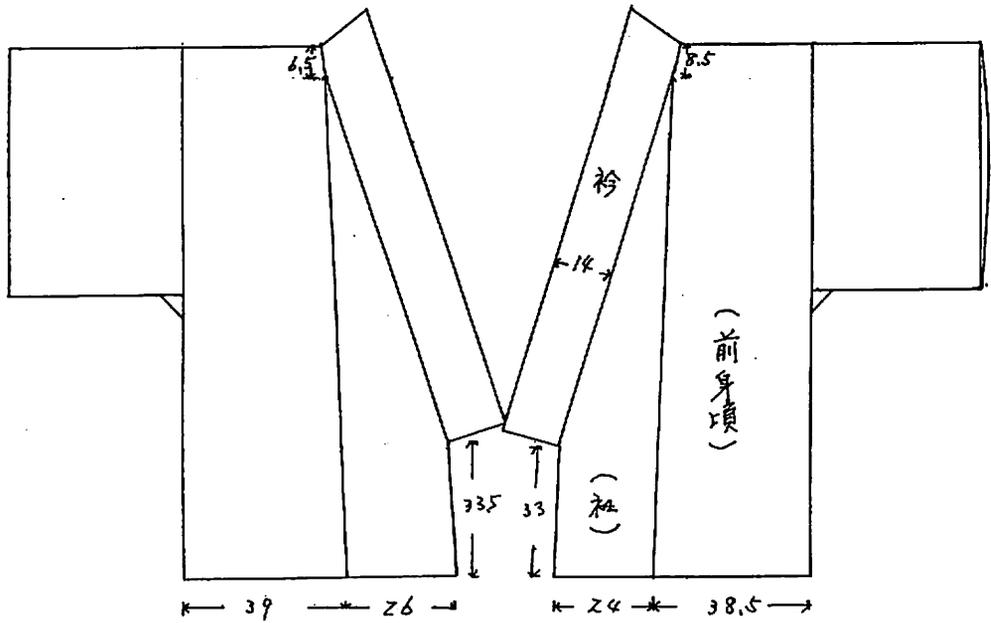


図2-B 苧麻平織青色大袖衣・前身頃実測図

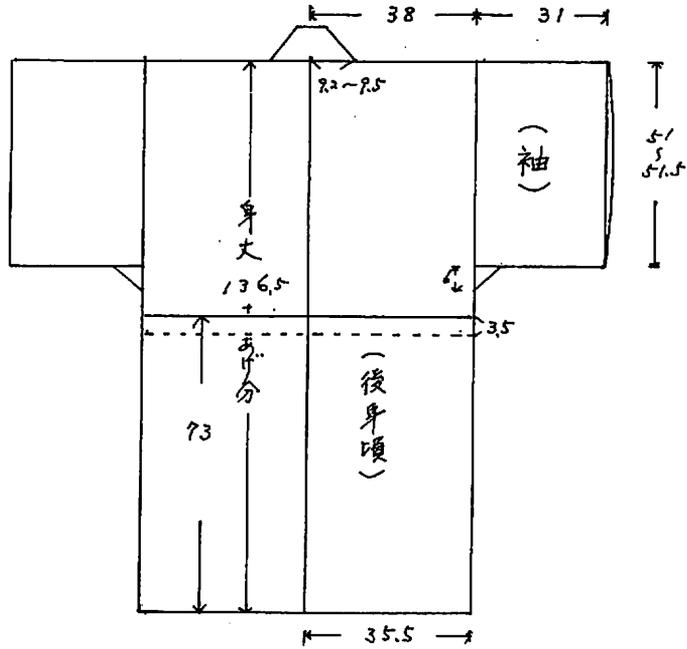


図3-A 苧麻平織白地笹に梅小花唐草模様大袖衣・後身頃実測図

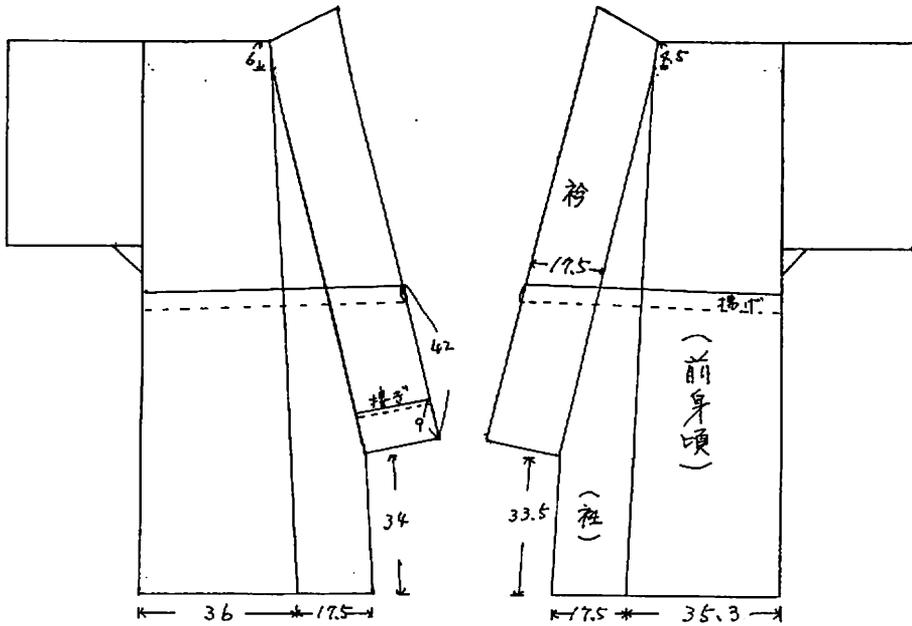


図3-B 苧麻平織白地笹に梅小花唐草模様大袖衣・前身頃実測図

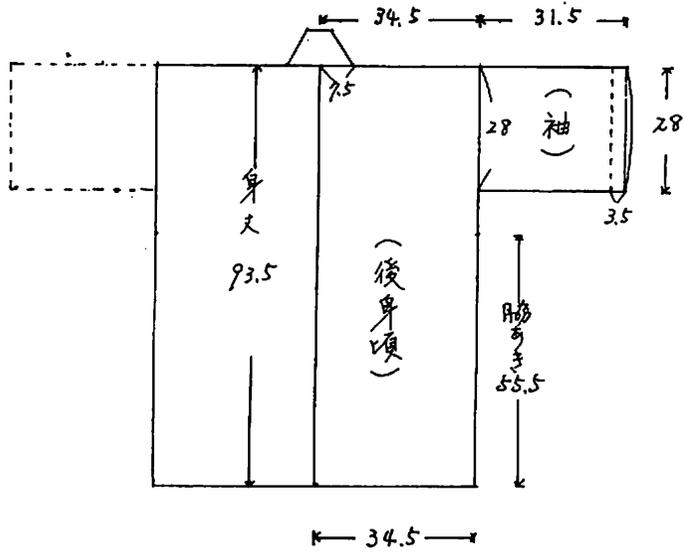


図4-A 絹平織緑地菊花鎖繫模様単胴衣・後身頃実測図

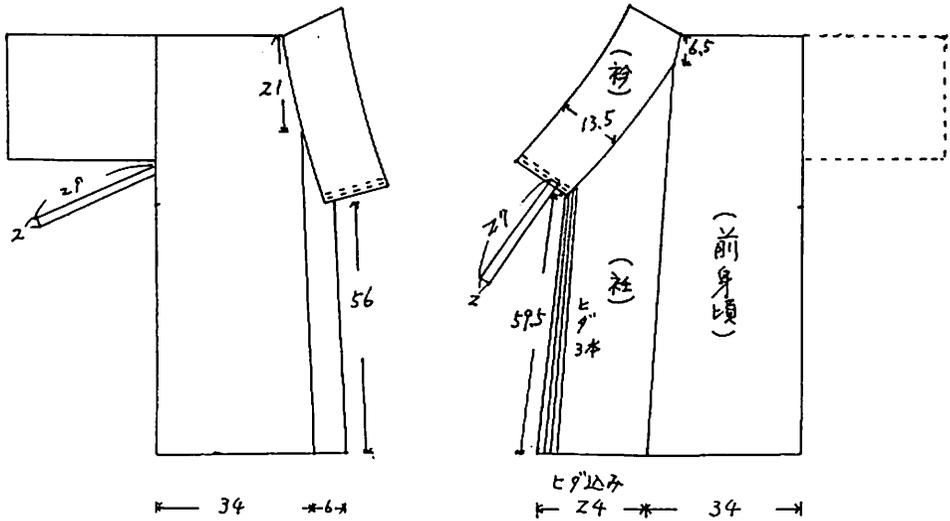


図4-B 絹平織緑地菊花鎖繫模様単胴衣・前身頃実測図

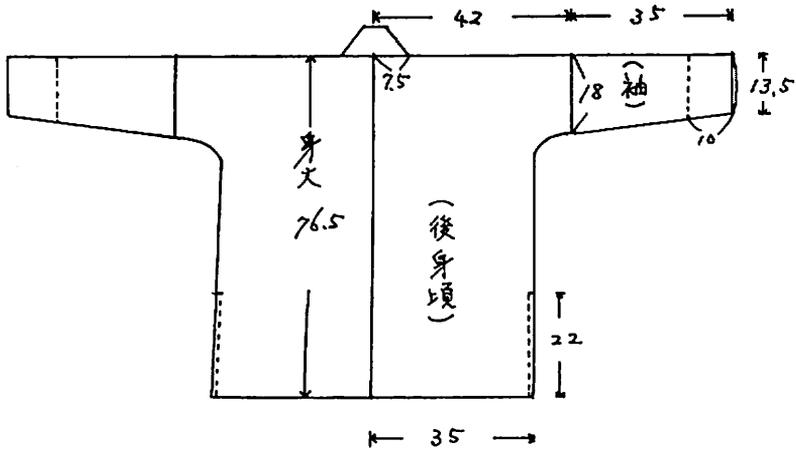


図5-A 芭蕉平織太緯縞単胴衣・後身頃実測図

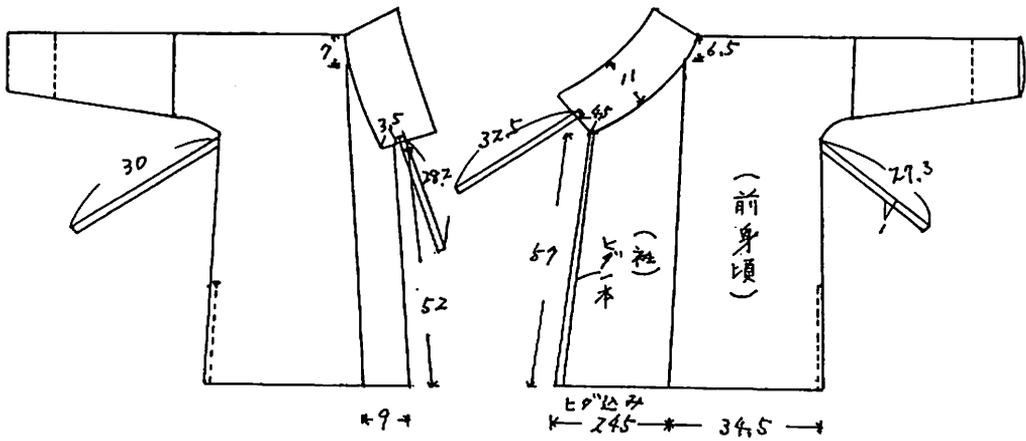


図5-B 芭蕉平織太緯縞単胴衣・前身頃実測図

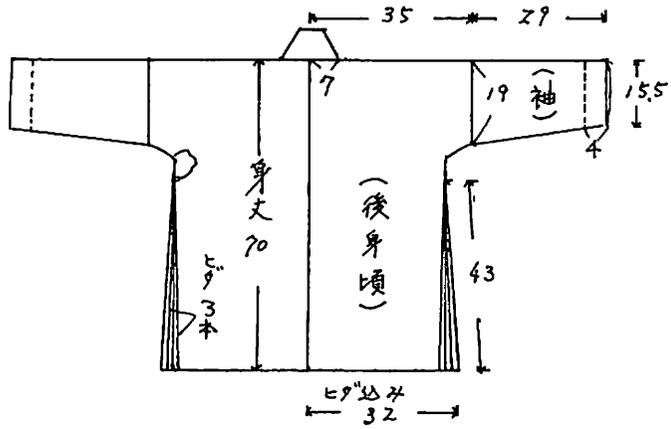


図6-A 絹平織金茶地格子縞単胴衣・後身頃実測図

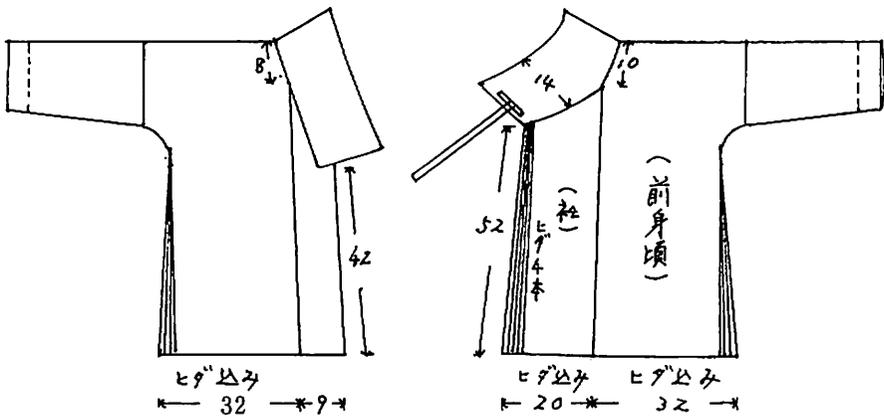


図6-B 絹平織金茶地格子縞単胴衣・前身頃実測図

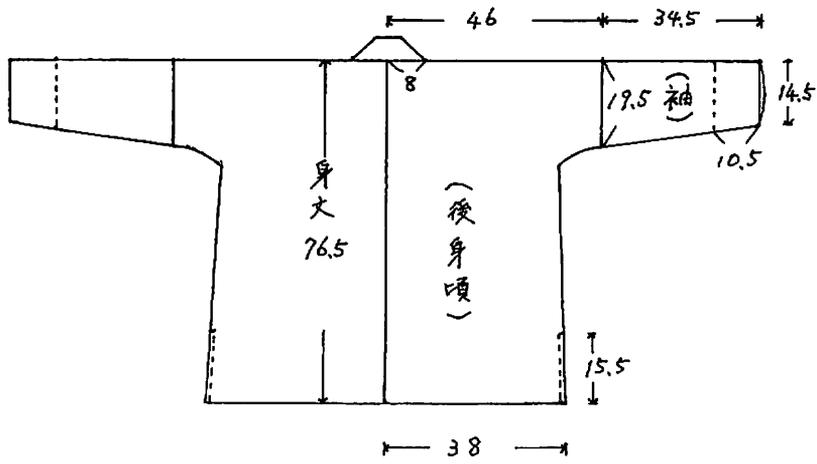


図7-A 芭蕉平織赤茶単胴衣・後身頃実測図

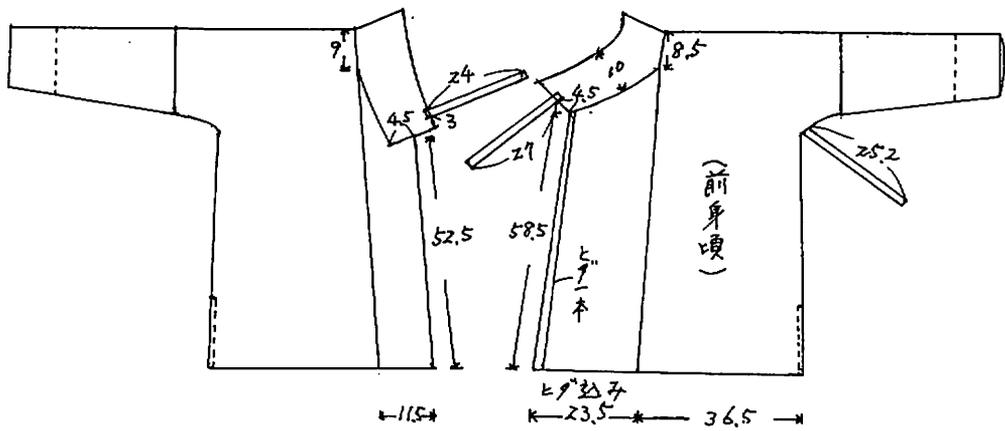


図7-B 芭蕉平織赤茶単胴衣・前身頃実測図

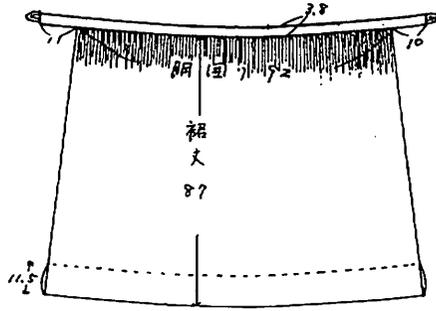


図8 芭蕉平織裙・実測図

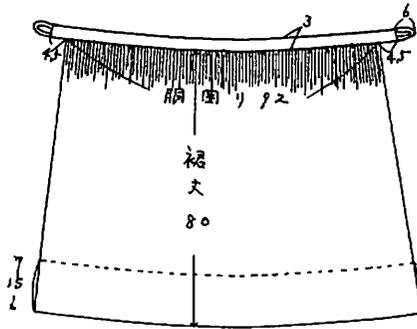


図9 木綿平織藍色裙・実測図

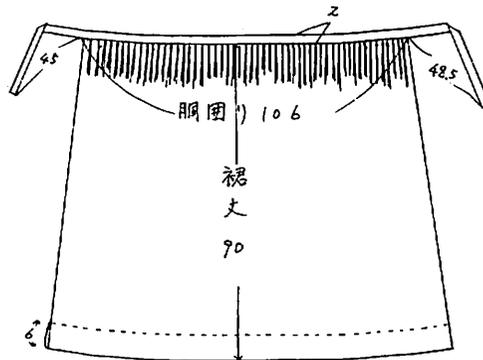


図10 木綿平織白裙

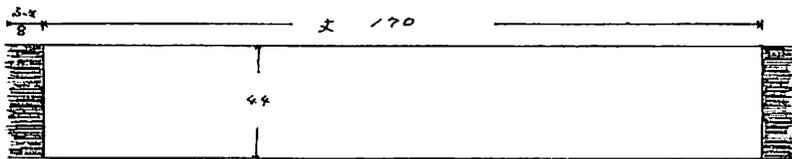


図11 絹平織金茶地苺手模様手帕美巾

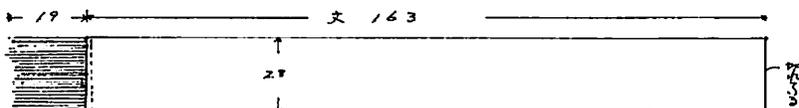


図12 芭蕉平織灰緑地亀甲吉祥模様紅型手帕

久米島具志川村兼城新城家衣裳の寸法表

大袖衣

資料	1	2	3	4	5	6	7	8
素材	芭蕉	苧麻	苧麻	木綿	苧麻	羽二重	新モス	木綿
模様・色	濃紺	青色	白地に紅型	白地捺染	白	白	黒	白
各部名称								
袖幅	39	40.5	31	33.5	37	35	35.5	33
袖丈	56.5	61.5	51~51.5	55	57.5	57.5	61	53
袖口	56.5耳	61.5耳	51~51.5耳	55耳	57.5耳	57.5耳	61耳	53耳
袖付	56	61.5	51~51.5	55	57.5	57.5	61	53
襦	9.5	5	6	なし	3.5	6~6.5	なし	なし
身丈	128.5	132.5	136.5+あげ	141	125	137.5	135	125
衿肩明	8	7.5	9.2~9.5	8	7	8.5	9.5	8.5
肩幅	39.5	39.6	38	33.5	37	35	36	35
後幅	39	39.6	35.5	33.5	37	34.5	36	35
前幅	38.5	38.5	左身 右身 35.3 36	32	35.8~36	34.5	34	33
衿下がり	10	左身 右身 8.5 6.5	左身 右身 4.5 6	左身 右身 12 9	6.8	左身 右身 17.5 16.5	左身 右身 14 14.5	左身 右身 10.5 12
抱幅	32	左身 右身 33.3 33.5	28.5	27	31	28	左身 右身 28 27	左身 右身 27.5 25
衿幅	19.5	左身 右身 24 26	17.5	左身 右身 15 16	21.5	16.5	左身 右身 17 16	16.5
合襖幅	19.5	左身 右身 24 24.5	左身 右身 17 16.5	左身 右身 14.5 16	左身 右身 20.1 21.5	16	左身 右身 16.5 15.5	左身 右身 15.5 14.5
衿下	左身 右身 36 35耳	左身 右身 33 33.5耳	左身 右身 34 34耳	左身 右身 33.5耳 34	左身 右身 20耳 19	左身 右身 32.5 32耳	左身 右身 32耳 32	30
衿幅	17耳	14耳	17.5耳	15	14耳	17耳	16	15
衿つけ込み	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1.5	左身 右身 4 2
腰揚げ位置	なし	なし	裾から肩へ 73	なし	なし	なし	なし	なし
布幅	40	41	39	広幅	38	36	広幅	広幅

耳は布耳のことである。

胴衣

資料	1	2	3	4	5	6	
模 様・色 各部名称	素材	絹	芭蕉	絹	芭蕉	木綿	木綿
		緑地鎖繫紋	横縞	金茶格子	赤茶	灰色地よろけ縞	白
袖幅	31.5	35	29	34.5	32	30	
袖丈	28				29	28	
袖口	28	13.5	15.5	14.7	29	28	
袖付	28	18	19	19.5	29+マチ	28+マチ	
襦					6	8.5	
身丈	93.5	76.5	70	76.5	82	82	
衿肩明	7.5	7.5	7	8	8.5	9	
肩幅	34.5	42	35	46	34.5	33	
後幅	34.5	35	32	38	33.5	32.5	
前幅	34	34.5	32	36.5	25	32.5	
衿下がり	左身 6.5 右身 21	左身 6.5 右身 7	左身 10 右身 8	左身 8.5 右身 9	9.5	12	
抱幅	左身 28 右身 30	左身 37.5 右身 35.5	左身 31 右身 32	38.5	左身 26 右身 26.5	23.5	
衿幅	左身 24 右身 6	左身 24.5 右身 9	左身 20 右身 9	左身 23.5 右身 11.5	左身 7.5 右身 8	左身 7.5 右身 8	
合襦幅	左身 21 右身 5.5	左身 19.5 右身 8.7	左身 16 右身 7.5	左身 18.5	7	左身 7.7 右身 8	
衿下	左身 59.5 右身 56	左身 57 右身 52耳	左身 52 右身 42	左身 58.5 右身 52.5	23.5	25.5	
衿幅	13.5	11	14	10	10	12	
衿つけ込み	右身 2	右身 3.5	右身 2.5	右身 4.5			
脇明	55.5	22	43	15.5	14	15	
布幅	35	43	36	47	37	35	

裙

資料	1	2	3
素材	芭蕉	木綿	木綿
模様・色	無地	藍色(黒)	白
各部名称			
裾丈	87	80	90
胴回り	92	92	106
胴回り布幅	3.8	3	2
裾上げ	11.5	15	6
角出し布	左 11 右 10	左 4.5 右 4.5	左 45 右 48.5
輪	3.5	6	
布数	38×14枚+27	35×9+25	68×2 74×1
布幅	39	36.5	75

手帕

資料	1	2	3	4	5	6	7	8
素材	芭蕉	絹	木綿	苧麻	苧麻	芭蕉	木綿・麻	苧麻
模様・色	亀甲紅型	緯浮紋	格子	無地	無地	無地	無地	無地
各部名称								
長さ	163	170	114	138	162	163	181	139
幅	28	44	26.7	31	39	46	34	28
ふさ	19	8	3.5~10		6.5			0.5~1.5